

Management Club Report

Apr.2005/Vol.28

Monthly Opinion 優良歯科医院から秀逸歯科医院へ

現代の危うい富裕層

先日NHKテレビで、「所得格差の広がり」について特集した視聴者参加型の討論番組がありました。ご覧になった方も多いと思います。様々な年代、職業、経歴の人がたくさん集まり、今新たに大きくなりつつある貧富の差の実態とその影響や、企業社会の中で広がった成果型給与体系の「成果」とその歪などの問題、あるいは時流を巧みに捉え若くして財を成した起業家が存在する一方で、ニートと呼ばれる同世代の若者が増加するなど、現代社会の抱える光と影の部分についての熱い論戦が展開されていました。

富裕層の代表として、今を時めく“ホリエモン”や、人材派遣会社を起こした女性社長などがゲストとして招かれ、自説を盛んに訴えておりましたが、彼らに共通するものは「実力主義礼賛」でした。

そのとおりだと思います。実力相応であることこそ真の平等だとは思いますが、突出した成功者があまり「実力主義」を声高に唱える姿には、多くの参加者から反発を買っていた風にも見受けました。

実力があり努力もした結果ではあったとしても、そこは少し謙虚に「好運でした」とか「ラッキーなことが幾つも重なりました」ぐらいのことを言っておいた方が良かったのではないのでしょうか。そうすれば「ツキを呼びこむのも実力の内」とか「大きな努力が好運の女神を連れてきたのだ」といった賞賛の言葉がもらえたのかもしれない。

多くの新富裕層の今の莫大な富は、彼等の直接的な生産活動によってというよりも、株式上場や企業買収といった投資活動を通じて加率的に増大したものであり、一種のマネーゲームにおける勝利という側面がないわけでもありません。反面いつアンラッキーな状況に陥り、どこでゲームに負けるとも知れないわけで、地道な生産活動に比べればその危うさは計り知れないものがあるように思えます。強気で使ってみせた「想定内」が皮肉られたように、勝ち誇ったような「実力主義」が皮肉られることになるかもしれないのです。

しかし、「好運」を語る謙遜と「実力」を称えるようなやりとりは、所詮「馴れ合い」でしかなく、お互いの甘さを舐め合うだけの非建設的な行為であるとも言えます。彼等のやや傲慢ともとれる言動の裏には、そのような感傷を否定する凄みを感じられることも事実です。「一寸先は闇、もし失敗するとしたらそれも実力」心底そのように考えているのかもしれない。

歯科医師は「適度な富裕層」が良い

かつて我が国の富裕層は、高級官僚、大企業の役員、大学教授、医師、歯科